



神戸国際大学

キリスト教センター通信

(2024年12月17日) 第123号

「クリスマス休戦」

理事長 バジル八代 智

メリー・クリスマス! クリスマスおめでとうございます。このシーズン、世界中で一体どれほど多くの人たちが、こう言ってクリスマスをお祝っているのでしょうか。一般に世界中のキリスト教人口は20億とも25億とも言われておりますが、特にキリスト教でなくとも「メリー・クリスマス!」と言って乾杯する人々も加えますと物凄い数になるでしょう。

逆に世界を見渡せばクリスマスをお祝いたくとも、様々な理由で祝えない人々も数多く存在します。とくに今年はここ日本でも能登半島の地震や水害と、住み慣れた我が家を失って今も仮設住宅や親戚の家を転々としている多くの被災者にとってはクリスマスどころではないでしょう。更にウクライナやイスラエルのガザ地区で、今も命懸けの戦闘状態にある兵士たちもクリスマスをお祝うことなど不可能でしょう。でもそんな逆境の中にあっても、ささやかながらもそれができたとしましたら、つまり苦しいながらもほんのわずかでもクリスマスをお祝えたとしたら、どれほど嬉しいことでしょう…。

時は1914年12月、ベルギー領イープルは第1次大戦下のドイツとイギリスが熾烈な戦いを繰り広げる戦場と化しておりました。

両軍ともに数多くの戦死者を出し、ドイツ兵もイギリス兵も心身ともに疲れきっておりました。そんなクリスマス・イヴの夜、みぞれ交じりの寒さの中、一人のドイツ兵がドイツ語で「聖しこの夜」を歌いはじめました。おそらく家族とともに過ごしたクリスマスの思い出に浸っていたのでしょう。優しいお母さん、パイプを加えたお父さん、妹や弟たち、あるいは故郷で待ちつづける愛しの妻や彼女の笑顔も浮かび上がっているかも知れません。



銃声の鳴り止んだ夜空に、その歌声は監視していたイギリス兵の耳にまで届きます。それを聞いたイギリス兵も、英語で聖しこの夜を口ずさみ、やがて両軍、砲弾や銃声ではなく、クリスマス・キャロルの大合唱となりました…。このクリスマス・キャロルは戦闘状態にあった両軍兵士たちの心を、一気に揺さ振りました。ドイツ兵たちはたくさんのローソクを集めて木に灯し、急造のクリスマスツリーを塹壕から見えるように高くかざしました。それに対してイギリス兵たちも「メリー・クリスマス」と書いた大きな看板をドイツ側にかざします。やがて両軍から勇気ある兵士が、一人また一人と武器を置き、塹壕を登って歩み寄りをはじめました。荒れ果てた戦場の真ん中で、さっきまで撃ち合っていた敵同士が、あたかも旧知の友であるかのように互いに抱きあい、お菓子やタバコを分け合って、主イエスのご誕生を、そしてお互いの無事を喜び合い、カタコトの言葉でお互いを励まし合ったのです…。

これが歴史に名を残す、有名な第一次イープル戦の「クリスマス休戦」です。残念ながらその後、両軍ともに事態を憂慮した上官の強い中止命令が発動され、両軍ともに兵士たちは上官の命令に従って悲しみのうちにまたそれぞれの塹壕へと戻ってゆきました。そしてまた以前と同じ銃撃戦が、悲しみのうちに再開されたのです。結局このイープルの戦いは第3次まで長引き、彼らの大半は戦死したと伝えられております。それでも、ほんの一瞬でも「メリークリスマス!」とお互いに言い合えた喜びは、死のきわに至るまで、きっと彼らの心を満たしたことでしょう。今から



110年前のクリスマス・イヴの晩に起きたこの奇跡は、わたしたちにまことの平和をもたらすことのできるお方は誰なのか、ということを教えてくれます。それは決してドイツ皇帝やイギリス国王などの人間ではない、ただお一人の平和の君なのです。平和の君、愛の王様、そのお方のご誕生を心からお祝いしてメリー・クリスマス!!

